

外部評価



1. 評価実施者

沖縄国際大学名誉教授 宮城 邦治
(沖縄県環境影響評価審査会 会長)

2. 評価

今回の報告書は昨年同様に学生委員会が作成した表紙で、「沖縄の海の表と裏」というテーマを伝えるものとなっている。明るく美しい海とゴミ景観の海浜はまさに沖縄の海の表と裏であり、表の海も裏の海もすべて人間のなせる結果である。学生委員会の小さなメッセージが多くの人々に伝わることを期待したい。

さて、琉球大学のエコロジカルキャンパスへの取組みはⅢ章からⅣ章に、その肝が記述されており、2019年、西田学長の力強いメッセージとなった「SDGsへの取組み」以来、貴大学の努力は着実に実を結び、毎年の報告書にその成果が記述されています。Ⅲ章の「SDGsへの取組」では、貴大学が取り組んできたSDGsに関する様々なアクションが詳細に記述されており、特に「高大接続の取組」「ユネスコスクール活動支援」「社会課題解決研究プロジェクト」「SDGs研究シンポジウム」等は高く評されるものです。このような貴大学の取組みは「THE大学インパクトランキング2022」においても高く評価される結果となっています。Ⅳ章の「環境活動」において、関係する部署の活動が概要されていますが、中でも学生委員会の活動は注目に値するものです。2012年に発足して以来、学部横断的に集まった意識ある学生たちの活動は、貴大学が掲げる環境憲章の1.自然との共存、2.ひと・対話、5.大学の社会的責任を実践しているものと思慮します。学生委員会の地道な活動ではありますが、次代を担う学生たちの思いは必ずやエコロジカルキャンパス実現の大きな力になるものと確信します。

Ⅴ章の「環境負荷」では貴大学が如何に様々な資源と向かい合ってきたかが数値として可視化されています。総エネルギーの投入量は前年度比でわずかに目標値に達していませんが、中期目標値においてはマイナス9.9%となっており、削減の努力を垣間見ることができます。当然ながら総エネルギーの投入量がわずかに多くなった分、二酸化炭素の排出量も前年より多くならざるを得ませんが、6年間の累計ではマイナス13.1%となっていることは評価できるものです。電力消費量も前年比で微増していますが、前年の消費量がかなり減量していることを考慮すると、今回の消費量は相殺されるものだと評価します。水資源の使用量については目標値が未達成となっており、その原因についての究明が急務だと思います。これらの資源使用量を環境保全効果で見ると、すべての資源で前年比を越えており、環境保全効果が希薄であるのは残念である。しかし、Ⅵ章の「関係関連法令等の遵守」では多くの事項で目標が達成されており、貴大学の法令順守への姿勢は大いに評価されるものである。多岐にわたる学部があり、そこで使用される資源や廃棄物なども量的にも多く、多様なことを考慮しても、貴大学のエコキャンパス実現への努力は大いに評価され、期待するものである。

内部評価



リノベーションによる省エネルギーの推進

1. 評価実施者

工学部 電機システム工学コース教授 千住 智信
(工学部地域創生研究センター長)

研究者 DB



2. 評価

工学部では前年度から継続して今年度もリノベーションが実施されており、次年度の追加リノベーションにより工学部2号館の大幅な機能強化や建物の省エネルギー化が見込まれている。昨今のエネルギー価格の高騰ならびに円安により電力料金の値上げが今後予想されている。二酸化炭素排出量を削減することにより地球温暖化を阻止する事が求められていることから、今後は省エネルギーに関しても学内の建物のリノベーションを通じて推進する必要がある。

今年度の琉球大学環境報告書を省エネルギーの観点から概観すると先ず注目される点が12頁に記載されている環境活動の実施体制が示されており、各種資料より実質的なPDCA活動が実施されていることは評価に値する。学内の施設運営部が省エネ計画の策定の中心的な役割を担っており、環境・施設マネジメント委員会において学内の全体的な策定・実施・評価・改善について議論されていることから一貫通貫で今後の学内の省エネを推進して頂きたい。

次に注目される点は21頁の「THE 大学インパクトランキング2022」の記事である。本学の国内ランクが比較的高いSDGsカテゴリーのみが示されているが、逆に国内ランクが低い本学のカテゴリーが気になった。総合ランクが上位の国内大学は殆どのカテゴリーランクが高いと推察されるので、本学の総合ランクを大幅に上昇させるためには弱点の克服が重要である。国内総合ランクを本気で上昇させるためにあえて本学の弱点を見つけ出し、他大学の優れた活動等を取り組む等の工夫が必要ではないか。下位ランクの改善に向けた本学の今後の取り組みに大いに期待したい。

今回の評価で注目しているリノベーションによる省エネの推進であるが、42頁に農学部校舎本館棟改修工事(I・II期)と工学部2号館等改修工事(I期)による省エネ効果が示されている。学内における空調機や照明等のリノベーションにより、年間の省エネ効果は309MWhであり、今後の学内リノベーションにより省エネ活動を推進していただきたい。さらに、46頁には各年度の学内における総エネルギー投入量のデータが示されており、2020年度に大幅な低下が見られる。2020年度は新型コロナウイルスの影響で遠隔授業等が増加したことが大きな要因であると推測されるため、今後の省エネ等に関しては、情報通信技術を活用した遠隔会議等の拡大による省エネの強化も重要である。